

2 マスコミ報道にも力を得て.....

この傾向はまた、マスコミにとっても看過するわけにはいかないところでした。一種の“ブーム”ととらえたあたりに、いささかの疑問がなきにしもあらずですが、ことに新聞は、こぞって、幼稚園における漢字学習のありようを報道したものです。

もちろん、それ以前にも、石井方式自体は様々な形でマスコミに取り上げられておりました。とくに、昭和30年代後半以降、文部省の国語審議会を中心に論議が活発となった国語国字問題、とりわけ小学校の漢字教育をめぐる論争の中で、それは常に話題の焦点となっていました。

なかでも、昭和39年3月、第七期国語審議会に対し、吉田富三委員(東京大学教授、癌研究所所長=故人)が、「小学校の漢字教育について、石井勲氏の主張と実績とを専門的に調査研究し、漢字教育の方式として採用に価するものとの結論を得れば、国として採用の策を講ずること」と提案をしたことや、41年3月4日付「朝日新聞」社説の「石井方式を考える」と題した、国語問題に関しての「いわゆる“石井方式”はこの問題解決へ、一つの考える素材を提供している」という提言などは、大きな波紋を呼んだものです。(“吉田提案”については本書の410頁参照)

それはともかく、小路幼稚園などが実践を始めたこのころ、新聞が取り上げたもののうち、二、三の例をみてみましょう。

「漢字教育 幼稚園が効果的 二年間で一千字 かなより覚えやすい」という見出しで、昭和43年7月12日付「読売新聞」が、「漢字はかな文字よりも幼児、児童の頭脳によどみなく浸透し、記憶力、思考力はグングン向上するという漢字教育理論が文部省の方針などおかまいなしに、小学校どころか幼稚園にも普及しだした」と報じ、その年の6月から石井方式を採用したひかり幼稚園の教室風景を大きく写真に出して、「めきめき効果を現わしている。大阪市とその周辺都市で40の幼稚園が石井方式を採用したという」とも伝えています。

ここで興味深いのは、文部省の見解も併記している点です。「文部省はしぶい顔」という小見出しのあと、「これに対し文部省の玉越三朗教科調査官(幼児教育)は『漢字どころか、かなを幼稚園で指導するのさえ反対だ。具体的なことばを表現する努力こそすべきだ』と批判している」とあります。

文部省は、このころ、昭和46年度より、小学校6年間で教える漢字を、881字から996字に増やす決定をしており、いわば漢字教育の強化を目ざしていたわけですが、ちょうどそんな時期にもかかわらず、「漢字は小学校から」の原則を守ろうとする姿勢がよく現われているではありませんか。

この他、昭和44年3月11日付「朝日新聞」では、子どもたちが、学校へ上がる前に相当数の漢字を覚えている状況と、石井先生の提唱する石井方式とを踏まえて出された、漢字の「読み書き分離、読み先習論」をめぐって、伝統的な「読み書き並行論」との漢字教育論争を

取り上げています。

見出しは「読み優先か読み書き並行か 漢字教育にも時代の波 伝説と現代説が対立」というもの。

その記事のなかに、第九期国語審議会の総会の席上、各委員が白熱の議論を展開したとありますが、そのなかで、実践女子大教授の阿部吉雄委員が口火を切って、「読んだ字は必ず書けるようにする」という明治以来の教育方針に疑問がある。漢字を書くのは大きな負担だが、読むのはわりにたやすい。そこで、書くのはあと回しにして、まず読みの指導をしたらどうか」と発言し、その論拠として、幼稚園の指導で、幼児に一千字をたやすく読めるようにした実例を引合いに出したといえます。これは明らかに石井方式の実験を念頭に置いた意見です。記事の最後の方には、「この問題を提唱した石井勲大東文化大講師の実験によると、ある幼稚園で“鳩”という字を“はと”と教え、翌日読ませたら百人中 85 人が正しく答えられたという。漢字を読ませるだけの教育で、この方式はいま東京、神奈川、大阪、和歌山、京都など約百か所の幼稚園で試みられている」と紹介しております。

このように、新聞に限りませんが、雑誌、テレビなどマスコミが、石井方式の紹介に果たした役割りは少なからぬものがあったとはいえると思います。

全国各地の実践園へ、石井方式採用の動機について聞いたところ、たとえば、神戸市のあさひ幼稚園の高沢三子園長は、次のような理由をあげています。

「13 年ほど前、ふとテレビのダイヤルを回していると、番組名は忘れましたが、石井先生が子どもたちに童語をお話しながら、黒板へ漢字を書いていらっしゃる場面が出て参りました。拝見していると、これは良いことだと思い、すぐ先生のお書きになった本を色々取り寄せ、検討致しまして採用することに決めました。石井先生にも御来園いただき、今日までずっと努力しております」

石井方式採用の動機、キッカケは、マスコミの作用に限らず、このほかにも、各実践園によっていろいろとあるかと思いますが、とにかく、いずれの園でも、日々の努力の積み重ねが行なわれており、そのことがまた、年を追って実践園が増加することに、有形無形の影響を及ぼしているといえるでしょう。今日、全国で推定 400 に近い幼稚園、保育園に石井方式が導入され、活発な実践が為されている大きな要因は、そのあたりにもあるのではないのでしょうか。

というところで、毎日、何万人もの子どもたちが、楽しく繰り広げる漢字学習の実践現場を少しくめぐってみることに致しましょう。